

令和4年度 小平市立小平第七小学校 学校評価報告書

学校教育目標

本校及び地域社会の実態に基づき、「よく考える子」「いつも元気な子」「こころのやさしい子」の育成を目標に掲げ、その達成に努める。

目指す学校像(ビジョン)

- 【目指す学校像】 子どもも大人も笑顔と思いやりがいっぱいの学校
- 【目指す児童・生徒像】 ①よい考えいっぱい 他者と考えを深め合える子 ○あいさついっぱい すすんで行動しようとする子 ○思いやりいっぱい 相手の気持ちを考えられる子
- 【目指す教員像】 ○児童を心から慈しみ理解し、よさや個性を引き出し、伸ばす教職員 ○自らの課題を認識し、日々研鑽に努めると共に、協働して磨き合う教職員

前年度までの学校経営上の成果と課題

〈成果〉①学習者用端末を含むICT機器の活用や「学習プロセス」を生かした授業などの継続的な取組を生かし、児童が自分の考えを確かなものにするなど学力向上につながる授業改善を行うことができた。
 ②「特別の教科 道徳」の取組により、他者への思いやりについて深く考える児童の育成につながることができた。③コロナ禍においても可能な限り保護者・地域との連携を図り、教育活動を進めることができた。

〈課題〉①児童の「書く力」育成に取り組み、更なる学力向上を目指す。②挨拶の習慣化を図る。③体力向上への意識を高める。④心の教育の更なる充実を図る。

	具体的な方策	第1回評価		第2回評価		学校関係者評価 (成績・課題)	成績・課題・次年度以降の対策	
		取組指標	成果指標	取組指標	成果指標			
学力向上	「計算クエスト」「東京ベーシック・ドリル」等の実施やICT機器等を活用した分かりやすい授業を行うとともに、読書活動を推進する。	4	2	児童・保護者ともに、「学校で学習した内容を理解している」といについて、肯定的な回答は約9割であった。学習内容の確実な定着を図るために指導を行っていると回答した教員は、9割を超えていた。ICT機器を活用し、視覚的に分かりやすい授業を行っていることについては、97%の教員が肯定的な回答をしている。今後も、学習者用端末を活用しながら、より指導を工夫していく。「『すすんで読む』ことについては、児童が異なる声掛けが必要だと考える。	4	2	○教員は、ICT機器の活用とその指導方法の研究に積極的に取り組んでいた様子を見ることができた。 ○学習者用端末を活用して補助教材として活用し、児童の発達段階に応じて工夫された授業が展開されていたことは大いに評価できる。 ○全国学力調査の結果などから、学校だけでなく、家庭との協力が必要である。 ●放課後子ども教室や七小支援ネットを活用し、復習や反復練習の場を増やすことも考えられる。	学習内容の理解については、9割弱の児童が肯定的な回答をした。第2回目のアンケートでは、保護者の「とてもうきうきする」回答が約11%上昇し、学習面に対する指導の成果を見ることができた。ICT機器の活用については、CSの方々から教員がICT活用方法を工夫することにより、分かれやすい授業を開拓し、児童の集中して授業を受けているとの評価を得て、保護者の評価も9割弱が肯定的な回答であった。読書活動については、依然として個人差はある。今後も児童に読書の習慣が身に付くよう、定期的に声掛けをして、司書ボランティアと連携し、一層に興味をもつことができるよう活動を掛けていく。
	地域の教育力を生かした授業を行うとともに、「学習プロセス」を生じ、学習者用端末を活用するなどしながら課題解決型の学習や交流学習に取り組む。	4	3	「学習プロセス」を活用した課題解決型の学習や交流学習に取り組むことについては、91%の教員が肯定的な回答をしている。学習内容の確実な定着に対する意見は、「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業改善を図られ、定着していることが分かる。学習者用端末を活用することで、コロナ禍であっても対話的な学習が可能にしている。「あえてをもって学習に取り組み、すばら自分の意見を発言したり、友達の意見を聞いて確かめたりするようにしている」という設問に肯定的な回答をした児童は、79%であった。今後も、個別最適な学習の実現に向け、指導を工夫していく。	4	3	○児童の意見を聞いて確かめたりするようにしている」という設問に肯定的な回答をした教員は94%であった。1回目と比較して増加しており、児童の意見に反映されている。今後も、個別最適な学びと協働的な学びによる指導の在り方を模索していく。	
	児童の「書く力」の育成を通じて、「表現力」を高める指導の在り方を追究する。	4	2	今年度、校内研究の研究主題を「自分の思いや考えを言葉で表現する児童の育成へ書く力を高める指導の工夫を試して」とし、学年ごとに児童の実態にあわせた手立てを工夫することで、児童の書く力の向上に図っている。「日記や作文、ワクシートや振り返りカードなどにすばら自分の思いや考えを書くことにしていく」という設問に肯定的な回答をした児童は79%であった。今後も児童の変容に合わせて手立てを見直しながら進め、児童の書くことへの意欲を喚起する。	4	3	校内研究で児童の「書く力」の育成に取り組んだことで、児童の表現力を伸ばすための手立ての工夫に取り組んだことに対する教員の肯定的な回答は、97%から100%となった。児童アンケートにおいては、「日記や作文、振り返りやワクシートなどに、すばら自分の思いや考えを書くようにしている」の項目の肯定的な回答が増加した。校内研究の取組の結果として、文章を書くことへの抵抗が減ってきていている。今後は、語彙力や相手に対する文章の工夫についても更に伸ばしていく。	
健全育成(いじじめ防止)	いじめ防止アンケートを有効に活用して児童の実態を把握し、全校朝会等で人権意識の向上を図る。また、「特別の教科 道徳」をはじめ、教育活動全体を通じて思いやりの心の育成に取り組む。	4	3	児童の83%が「困ったことがあつたら相談できる人がいる」という設問に肯定的な回答をしている。あわせた全員の取組や目標からの丁寧な聞き取りにより、児童の見逃さないよう努めている。今後も、定期発見・解決を中心に、組織的な対応を行って、保護者に対する学校の取組を保護者会や便りを通じて知らせている。また、自分と友達との違いを理解して関わることを意識している児童が89%いる。今後も、五つを尊重し合つての大切さを伝えていく。	4	3	○SNSを通じた問題を想定し、相手の立場に立って考え方を身に付けることが求められる。「特別の教科道徳」の取組は重要であり、児童がねらいに沿って考えることができていている。 ○学校行事において、教員の指導に児童が答えて真剣に取り組む姿が見られた。 ●あいさつ運動を再開させ、挨拶の意味や人と人とのつながりの大切さを感じさせることができるとよい。	児童アンケートの「困ったことがあつたら相談できる人がいる」という設問に肯定的な回答をした児童の割合は、83%から88%に増加した。今後も何よりも相談できる関係を築き、カウンセリングを以てして児童の見逃さないよう努めている。児童が89%いる。今後も、相手の立場に立って多様性を認め合えることがきるよう、「特別の教科道徳」を中心に教育活動全体を通じて心の育成に努めていく。
	あいさつ運動を定期的に行うとともに、七小スタンダードを基に、授業等の規律の定着に取り組む。また、行事や諸作品募集等に積極的にチャレンジする機運を醸成する。	4	3	児童の88%が「先輩や友達とすこしやさしくしている」という設問に肯定的な回答をしている。日常の様子や場面で自然にあいさつの言葉をこなすようになっている。「七小スタンダード」については、肯定的な回答をした児童が87%、チャレンジすることについては、学校が上記ほど増加する傾向にあるものの、81%が肯定的な回答をしている。今後は、つづいては、「コロナ禍による実施可能な点が増えてきているので、児童が更に積極的にチャレンジできることができるよう、機運の醸成に努めていく。	3	3	○先輩や友達に自分からあいさつしている」という設問について、1~2回目ともに9割近くの児童が肯定的な回答をしており、挨拶の習慣が定着している。「七小スタンダード」については、肯定的な回答をした児童が増加した。チャレンジすることについては、2回目のアンケートの結果が約5%減っている。大きな行事に限らず、日常の学校生活の様々な場面ですぐに取り組む気持ちを育てていくようする。	
体力向上	外遊びの励行などで、体育的活動を充実させることで、運動の日常化を図る。	3	2	休み時間の外遊びについて、肯定的な回答をした児童は73%、教員は88%である。昨年度の同時間と比較して、教員の割合は、17%増加している。保護者の「お子様は外遊びや運動を通して体力を付けています」という設問の肯定的な回答の割合は、82%でコロナ禍であっても少しすつ運動する機会が増えていると感じていること分かる。今後も、感染症対策を施した上で、児童の体力向上を図るよう努めていく。	4	2	○コロナ禍であっても、運動会や持久走記録会などを中止せずに行ったことはよかったです。 ○運動会では、取り組む時間が限られたが、児童全員ががーとの目標に向かい協力して取り組むことができたことによる学習効果は高かった。 ●コロナ禍で周囲に遊びや児童が減ったように思う。児童が個々の運動を経験し、日常生活が回るといよい。取組の手伝いができるようになるよ。	休み時間の外遊びについて、教員の肯定的な回答が増加した。今後は、休み時間に限らず、運動会、持久走記録会、なわとびチャレンジなどの機会を、児童の体力向上に向けた取組と捉え、更に意識して指導を行っていく。
	養護教諭、栄養士、地域、企業、関係機関等と連携した健康教育・食育を充実させ、健康の保持増進について指導する。	4	2	保健の授業や保健だより、栄養士による食育の授業や星の給食に関する校内放送などを通じ、児童は、健康や食事に関する関心や意識を高めている。健康の保持増進に関する設問の肯定的な回答率は、児童が80%、保護者が77%となっている。引き続き、学校・家庭が連携して規則正しい生活を送ることができるよう協力していく。	4	2	○寝る時間や食事の仕方に気付いている」という設問に肯定的な回答をした児童は、1回目より増加して82%であった。一方、「お子様は寝る時間や食事の仕方に気付いている」という設問に肯定的な回答をした保護者は、若干低下した。児童と保護者の意識に差がある、それも埋めていく必要がある。学校では、保健指導や食育指導を継続的に行い、コロナ禍で制限している外部との連携も進めていく。学校・家庭が協力して児童の基本的な生活習慣を維持・食に関する意識を一層高めていくようする。	特別支援教室は「なまなづき」の教員による研修や教員間の連携した指導により児童に対する支援体制を充実させることができている。保護者アンケートの学校は、一人一人の状況に応じた指導をしているとの設問の肯定的な回答率は、増加した。今後も特別支援教室の教員と連携し、特別支援の視点を生かした指導を工夫したり、全ての児童に丁寧にやさしく環境を整えたりしていく。
特別支援教育	特別支援教育の視点で落ち着いた学習環境の整備や分かりやすい授業づくりを行なう。また、月1回ミニ研修を行い特別支援教育の指導方法・内容への理解を深める。	4	2	特別支援教室「なまなづき」の教員による研修や教員間の連携したから、児童の実態に合った指導をすることができる。肯定的な回答をした教員が97%となっている。また、ユニークサードデザインによる学習環境づくりも継続している。一方、保護者の「学校は一人一人の状況に応じた指導をしている」という設問に対する肯定的の回答の割合は、78%となっており、保護者会等で具体的に育成の機会を工夫していく必要がある。	4	3	○特別支援教室の授業では、児童一人一人に対する接し方や指導方法の工夫が見られ、分かりやすい授業が行われている。 ●コロナ禍もあるが、幼稚園・保育園・中学校との連携の状況の情報を可能な範囲で知りたい。	今年度の「中連携」は、学力向上に重点を置き、児童・生徒の「書く力」の育成を目指した。各教科で「振り返り」を行なって、書く量や質が高まっていることが成績である。今後も継続して取り組むことが必要である。保護者アンケートでは、「学校や、地域の幼稚園・保育園・中学校と連携し、継続した教育を行なっている」という設問に対して78%の保護者が肯定的な回答をしている。入学前の保・幼・中との連携や「小1プロローグ」「中1ギャップ」に対するようこそ先輩の取組などは毎年行なっている。こうした取組の実施についてCS委員や保護者に発信している。
	各関係幼・保、中学校と連携し、適切な就学及び小学校6年間だけ終わらない連携した教育を行う。	3	2	保護者の「学校は、地域を幼稚園・保育園・中学校と連携し、継続した教育を行なっている」の設問に対する肯定的な回答が4%であった「小・中連携」において、六中学生全体会児童・生徒の「書く力」の向上を図っていること、幼稚園・保育園と小学校、第6学年と中学校との引き継ぎなどの連携に向けた取組について、保護者会や便り等で紹介するなど、本校の取組を発信していく必要がある。	2	2	○様々な行事において、保護者が多く、連携がされている。 ○10月に2日間に渡る「CS連携講座」を開催された。今後も定期的に開催したい。 ●放課後子ども教室や「七小支援ネット」の活動を普及する場が必要である。	今年度は、7小支援ネットを活用した授業を展開することができた。また、60周年行事に向けても協力いただき、校内環境の整備など、協働して取り組むことができた。一方で、放課後子ども教室「まなびひろば」や七小支援ネットと連携した学習ボランティアや教員の連携については、再度強調するものにできるよう働きかけていく。
連携地域	学習支援ボランティアの実態を図り、地域人材や関係機関の活用を積極的に行い、連携したよりよい教育活動を展開する。	4	3	昨年度は、コロナ禍で地域人材の活用が十分できなかつたため、教員による評価数値は1%であったが、今回は4%に回復した。「地域の教育力を生かし、学校支援団体アソシアなど人材活用を進めている」という設問について、89%の保護者が肯定的な回答をしている。今後も、感染症拡大防止に努めながら、実現可能な方法を探り、児童の資質・能力の定着を図っていく。	4	3	○様々な行事において、保護者・地域の参加が多く、連携がされている。 ●放課後子ども教室や「七小支援ネット」の活動を普及する場が必要である。	今年度は、7小支援ネットを活用した授業を展開することができた。また、60周年行事に向けても協力いただき、校内環境の整備など、協働して取り組むことができた。一方で、放課後子ども教室「まなびひろば」や七小支援ネットと連携した学習ボランティアや教員の連携については、再度強調するものにできるよう働きかけていく。
	教育計画の電子化及び職員会議等におけるペーパーレス化を行う。また、会議の精査や通知文などの精選、アンケート調査における学習者用端末の活用など方法の改善を図る。	3	2	CatH等の活用により、現状で可能なペーパーレス化を図ることは、定着している。今年度は、学校行事の内容や会議の精査、通知文の精選、保護者アンケート等へのICT機器活用などを図っている。まだ取組状況に差はあるものの、今後浸透していくよう努める。	3	2	特記事項無し	各行事や校務の内容、会議の精査、通知文の精選などを通じて学校としての働き方改革は進んでいる。学校としての取組が個人の働き方に反映されている。今後も、よりよい業務の在り方を検討し、進めていく。